

大正・昭和初期の学芸会にみる熊本・山鹿の劇場の役割

山崎 浩隆

The function of the theater of Kumamoto and Yamaga seen in the Taisho and early Showa school play

Hiroataka Yamasaki

(Received September 29, 2017)

1. 問題の所在

学校と劇場は地域における文化形成の核である。

学校はそこで学習する子どもを対象としており、劇場は地域住民を対象としている。

現在、劇場では多くの公演が行われるとともに平成25年に文化庁より告示された「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針」によって学校をはじめ、福祉機関、医療機関等と連携・協力して芸術と触れる機会の拡充に努めている。学校と劇場は、連携して地域文化の形成に関わっているのである。その一つとして劇場が主体となり演奏家によるアウトリーチ活動やワークショップ等が行われている。

劇場側が学校と連携することについて、中村は「アウトリーチを通じたコンサートの観客養成であり、地域の音楽文化環境に持続的な刺激を与えることで音楽ホールの存在意義を強化していこうとするところにある」¹⁾としている。逆に学校側が劇場と連携することについて、壬生は「邦楽器をはじめとした学習指導要領の指導内容の拡大は、学校外の教育力の活用や協力を前提としたものである」²⁾と指摘している。学校で触れることのできない芸術・文化に直接的に触れる体験ができることを学校が求めているというのである。学校と劇場とが連携することによって地域文化を形成し、それを拡充することが求められているのである。

これは現在のことだけでなく、明治期に学校と劇場が建設されて以来、両者は連携していたのではないだろうか。特に、明治期は西洋文化を盛んに取り入れていた時期である。学校では、西洋音楽をもとに制作した唱歌を教材として活用してきた。民間の劇場でも西洋文化を敷衍しようとする政策に抗うことなく、学校と連携してそれを遂行しようとしたのではないか。そこで、明治期における学校と劇場の関係を見ることにした。その中から今後、学校と劇場が連携を進める上

で参考となるもの見だし、地域文化の拡充に寄与できるのではないかと考えた。

熊本県山鹿市には明治時代の末に建てられた歌舞伎(式)劇場「八千代座」がある。建設当時の場所に平成13年に改築され、現在も歌舞伎をはじめ映画や演劇等、いろいろな公演が行われている。

その一つとして、山鹿小学校6年生が年に一度、演劇の発表をこの八千代座を舞台として行っている。これは、平成の改築後に始まったものであるが、改築前の大正・昭和初期にもこうした劇や合唱の発表の舞台となっていたことが推察される。劇や合唱の発表会と言えば「学芸会」ということになる。現在、その名称が「学習発表会」や「校内音楽会」等と様々なものになっているが、学校と劇場とをつないでいたのでは「学芸会」ではないかと考えた。

本稿では、この「学芸会」を中心に学校と劇場との関係を山鹿市の八千代座と山鹿小学校、そして熊本市内の劇場と小学校とを中心に考察し、地域文化の形成に劇場が学校とどのように連携していたのか、どのような機能をもっていたのかを明らかにしていく。

なお、本稿における「劇場」は、明治時代末期から昭和初期にかけて建設された映画、演劇、音楽等の公演が行われていた施設とする。

2. 先行研究

学芸会をはじめとした学校行事に着目した研究として、山本と今野は天皇制を敷衍するための儀式が学校行事であったことを明らかにしている³⁾。その中で、「運動会と学芸会は二大行事」といわれ、学校行事の二大花形であったと述べている。その根拠として三つの学校の記念誌に記された昭和10年代初期の「学芸会の思い出」の中から以下の記述を示している。

(1)「学芸会は2月の初め、今のアイデン会社の所に昔あった友楽座と言う劇場を一日借り切り下の桝席

に生徒、二階は父兄席で前日からお弁当を作って家中で大騒ぎして楽しく過した事を覚えております。」(埼玉県岩槻市岩槻小学校九十周年記念事業運営委員会『九十年記念誌』1973)

(2)「その頃の西校は一年おきに3学期の2月、大々的な学芸会が催され、2学期の11月頃から学年毎に練習を始めました。男女一しょに練習するのですから大変、ちょっとまちがっても『キャー』だの『ウー』だのひやかされたものです。会場は熊盛座(松竹映画劇場)花道つきの劇場を二日間借り受け、一日目は児童に、二日目は父兄に見ていただき、娯楽の少なかった当時、楽しみにしていました。」(熊谷市立熊谷西小学校開校百年記念事業実行委員会編『開校百年記念誌』1973)

(3)「講堂が早くから建設されたので学芸会も他校に比して盛大に行われた。始めは一月十五・六日であったが、練習のため冬休みがつぶれることや気候的なことなども考慮されて、中途から三月三・四日に変更された。父兄達や一般村民が、お弁当持参で一日中子供たちの一生懸命に発表する話や劇や舞踊等々を感激しながら見られている様子はテレビ等放送機関のない時代においては村を挙げての慰安の場であり、レクリエーションの場でもあった。それだけに当時の児童生徒や在職職員は真剣になって実施しただけに、各人とも強い印象として、ありし日の学芸会の思い出が胸中にきざみこまれている。」(中瀬小学校同窓会『中瀬小学校百年史』1970)

また、佐々木は学校行事の成立について研究しており、やはり学校行事の二大花形は学芸会と運動会であったと述べている⁴⁾。佐々木は、運動会についてはその根拠を示しているが学芸会についての記述は見当たらなかった。

学芸会が学校行事の花形だと言えるのはなぜなのか、その根拠はどこにあるのかを明らかにすることが学校と劇場との関係や機能を明らかにすることにつながるのではないだろうか。

3. 八千代座の概略

八千代座ができあがったのは明治44年1月である。明治・大正期には多くの芸能人が来演している。こけら落としは歌舞伎の松島家一座が来て大変な人気を集めたということである。

それ以降、歌舞伎、浄瑠璃、新派、浪花節芝居といった演劇の上演、琵琶の演奏会、そして映画の上映の他、大正期には「蛇ショー」が行われた記録も残っている。また、地元山鹿の出身で大勾当の称号を受けた小井手登以の三味線の演奏や「山鹿ちんこ芝居」と呼ばれて

いた山鹿少女歌舞伎、山鹿音楽同好会の主催による音楽会と地元の芸術、芸能の発表の場でもあった。

八千代座は公会堂としての役割を担っていたことがうかがえる。

4. 山鹿小学校の学芸会

昭和40年代の末から昭和50年代以降にかけて全国の各小学校で「九十年史」や「百年史」等の記念誌が発行されている。そこには、学校沿革史の他、地域の歴史や百周年記念行事の内容等、共通した内容も多い。その一つとして、卒業生による座談会および卒業生の寄稿に着目し、当時行われていた学芸会の印象や具体的な内容を拾い上げていく。

まず、明治末期以降の山鹿小学校の学芸会について、昭和50年に発行された百年史『山鹿小百年のあゆみ』を見てみる。これには、卒業生によって行われた座談会の逐語記録が掲載されている。座談会は卒業の年代別に明治、大正、昭和初期に分けて行われている。詳細は資料1の通りである。

この中に明治43年入学の卒業生が「(八千代座が)初めて使われたのが、陛下のお葬式の映画の上映でした。私が小学一年の時、それを見ました。」と語っている。ここで上映された映画は、明治天皇崩御の記録映画であろう。この方は明治43年入学とのことであるから、「小学一年の時、それを見ました。」ということは事実と異なっていると考えられる。ただ、この方の他に明治42年入学の卒業生が「明治天皇に殉死された乃木大将の一代記を5年生がやったので特に記憶に残っています。」と語っていることから山鹿小学校が学校行事を八千代座で行い始めたのは明治天皇崩御の翌年、大正元年あるいは同2年からではないかと推察される。また、八千代座では学芸会だけでなく教育活動の一つとして映画の上映会も行っていたことがここでの記述から分かる。

明治末から昭和戦前のどの年代の座談会においても卒業生から学芸会の話が出ていた。しかも、鮮明に記憶されている。学芸会がいかに印象的な行事であったかということが明確である。この記録から、学芸会が学校行事の双璧の一つであったという指摘に大きく頷くことができる。

5. 熊本市内の小学校における学芸会

学芸会は熊本市内の小学校でも行われている。各学校の記念誌によると、どの学校でも大正時代に入ると行われていたようである。

資料2は現在の熊本市立城東小学校の記念誌から学

芸会に関する記述を集めたものである。これを見ると、卒業生の記憶として運動会はかなり出てくるが、学芸会については山鹿小学校ほど出てこない。

また旧職員の記述にあるように、この学校では学芸会を教室の間仕切りをはずして行っている。卒業生が寄稿の中で「その頃講堂がなかったの」という記述していることから講堂がある学校は講堂で学芸会を行っていたと考えられる。山鹿小学校でも昭和4年入学の卒業生が「講堂の出来るまでは八千代座で盛んだったね。」と発言していることから昭和7年に講堂ができてからは講堂で行っていたことがわかる。

熊本市内の小学校も山鹿小学校も講堂ができてからは講堂で学芸会を行っているようだが、それ以前の場合が異なっている。

資料3は、熊本市内中心部の小学校の百年史から学芸会に関する記事を取りあげ一覧にしたものである。やはり、学芸会の寄稿や座談会が行われていても学芸会の文言は出てこない。山鹿小学校の卒業生の記憶とは全く異なるのである。

では、熊本市内の小学校と近くの劇場とはどのような関係だったのだろうか。

6. 熊本市内の小学校と劇場

明治時代の末から大正時代にかけて、熊本市にも山鹿市と同じように劇場があった。

安田は熊本市の劇場について調査研究をしている。それによると、熊本市内にはいくつもの劇場が存在していた。東雲座（明治23年開場）、大和座（明治41年開場）、旭座（明治20年末広座として開場、明治35年に旭座と改称）、坪井座（大正6年開場）等の劇場である。劇場がある地域には小学校もあった。しかし、明治19年9月17日付県令第8号で、全27ヶ条からなる「劇場取締規則」が制定され、劇場を建てる場合、学校、役所より直線で2町以上離れていること等が義務づけられていたのである⁹⁾。つまり当時の劇場は「悪所」であり、子どもたちが近づいてはいけない場所だったのである。

しかし、「悪所」のままであり続けたのかということでもない。『城東小学校百年のあゆみ』によると、昭和6年に子どもの劇をラジオで公開放送するためのスタジオとして旭座を使用したと当時の教員が寄稿の中に書いている。劇場が市民にとってどれだけ「悪所」であったのか定かでない。市民にとってもともとそれほど「悪所」ではなかったのか、それとも「劇場取締規則」の制定から45年経る過程で次第にその意識が薄くなっていったのかは不明である。ただ、昭和初期には子どもが足を踏み入れてはいけない場所でな

かったことは子どもが劇場で劇を行っていることから明らかである。

熊本市において、学校が劇場を使用したという記録は上記のものだけで、その他には見つかっていない。学校と劇場はほとんど無関係のままである。

7. 他県における学芸会

「学芸会と運動会は学校における花形であった。」というのは熊本市内の小学校には該当しないということがわかった。では、それは熊本市内だけなのだろうか。

他県の小学校の記念誌をいくつか調べ、学芸会に関する記述等を一覧にしたのが資料4である。

これを見ると、学芸会についての記述がないことがわかる。寄稿や座談会が行われているにもかかわらず運動会の記述はあるのだが、学芸会についてはまったくといってよいほどない。つまり、卒業生にとって当時、印象にのこるほどの行事ではなかったということである。

そこで、先の山本と今野の研究で引用された二つの学校をもう一度見てみることにする。根拠として示されている(1)と(2)は文中に劇場名が出てくる。八千代座と山鹿小学校との関係と共通している。(3)には劇場が出てこない。原著にあたってみると、この引用は卒業生の寄稿や座談会を記録したものではなかった。つまり、著者の記述した部分である。おそらく旧職員が書いたか、あるいは旧職員から聞き取って書いたのではないかと推察される。だとすると、子どもの記憶ではなく、指導者側の記憶になる。指導する側にとっては印象に残る行事だったのであろう。また、この引用部分は第四章「昭和の教育」第二項「環境整備後の学校運営と成果」という部分に記されている。この項の記述は8割が運動会、残りの2割が水泳指導と学芸会のものである。指導する側にとっても、学芸会は運動会ほど印象深いものではなかったということであろう。

また、この引用の原著である『中瀬小学校百年史』には卒業生の談話も出てくるが、学芸会に関しては「私は明治二十七年六月、小学生として吉祥寺の学校へ入学しました。(中略)学芸会や運動会の行事はまだやりませんでした。」という記述のみであった。

8. 学芸会と劇場

こうして見てみると、学芸会が子どもたちにとって印象に残ったのはその内容というよりは、学校という空間ではなく劇場で行ったためであったと見ることが妥当だと考える。もちろん、学芸会は二大行事の一翼

をになっているのは間違いないだろう。しかし、学校の中で行われた学芸会が子どもたちの印象には残っていないということは、記念誌の記述を比較することによって明らかである。

印象に残る学芸会は、劇場で行われているものがほとんどである。それは、山鹿小学校や先行研究に示されている岩槻小学校、熊谷西小学校の記述からも分かるように子どもたちだけでなく保護者にとっても印象深いものであったであろう。

9. 結論

以上のことから学校における学芸会から劇場を見た場合、劇場はその内容の増幅装置として機能していたと考えられる。学校という空間の中で日中過ごしている子どもたち。それは、フーコーによると一望監視装置（パノプティコン）であり⁶⁾、いわば子どもたちの移動の自由を奪う施設と見ることができる。一年間の中で、その装置から外に出ることができるのが学芸会や遠足といった学校行事であった。学校という空間の中で過ごす日常から、学芸会・遠足といった行事によって非日常の別の空間へと身体を移動することができるのである。

そのことは資料の熊本市一新小学校の記念誌の記録からも分かる。大正5年の卒業生の寄稿に「一年の内が一番楽しいのは秋の運動会でした。当時は校庭がせまいので会場は藤崎台で現在の野球場の所でありました。」とある。やはり、学校から移動して運動会を行ったことが明確に記憶されている。

10. アウトリーチ活動への提言

このように、学校から劇場へ身体を移動することが学芸会を子どもたちに印象深く記憶に残すことにつながっていることが分かる。

では今後、アウトリーチ活動をどのように進めていけばよいのだろうか。そもそもアウトリーチ活動は、演奏家が学校を訪れて表現活動をするものである。子どもの身体は学校から移動することはない。したがって、劇場で行う学芸会と同程度の印象を残すことはできないだろう。しかし、身体の開放、身体を動かすことの体験活動をすることでそれに近づけることができるのではないだろうか。

初期のアウトリーチ活動は、子どもたちに一方的に聴かせるだけだったのが次第にワークショップを取り入れたり、活動の中にインタラクティブな関係を築こうとしたりするようになっていく。これは、一方的に聞くだけの活動に比べ、はるかに子どもの印象に残る

活動になっているはずである。

身体を開放し、身体を通して感じ取ることができる活動を行い、非日常的な感覚を味わわせることがアウトリーチ活動やワークショップ等には、必要なことだと考える。

11. 今後の課題

学校と劇場の関係を探るべく、学芸会を劇場で行うか学校で行うかという空間の視点から見てきた。今後は、その内容、コンテンツを通して探っていく必要があると考える。

メディアとして劇場をとらえるならば、大正・昭和初期において今日のテレビやインターネットと同様の機能を果たしていたことであろう。今日、テレビやインターネットが子どもたちに大きな影響を与えていることは明らかである。ただし、劇場がそれらのようにリアルタイムに情報を発信したり、インタラクティブな情報のやりとりを行ったりしたわけではない。しかし、劇場は当時のメディアとして子どもたちに大きな影響を及ぼしていたのではないだろうか。

劇場で行われていた公演の演目等、劇場のコンテンツから見ることで学校と劇場の関係がより有機的に明らかになるものと考えられる。今後、学校と劇場の関係をコンテンツの面から調査研究を行いたい。

注

- ¹⁾ 中村 透 2013「公共ホールとアウトリーチーその実践と課題」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.10, no.2,p.50
- ²⁾ 壬生千恵子 2013「音楽教育におけるアウトリーチを考えるーキャリア教育の視点とアウトリーチ」日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』vol.10, no.2,p.68
- ³⁾ 山本信良・今野敏彦 1977『大正・昭和教育の天皇制イデオロギーⅡ』新泉社, pp.170-171
- ⁴⁾ 佐々木正昭 2007「学校の祝祭についての考察：学芸会の成立」, 関西学院大学, 人文論究 57 (1), pp.52-70
- ⁵⁾ 安田宗生 2007『近代の熊本の劇場, 活動写真, 及び大衆演芸』龍田民俗学会, pp.8-9.
- ⁶⁾ ミシェル・フーコー 田村俣 訳 1977『監獄の誕生ー監視と処罰』新潮社, p.212

引用文献

- 山鹿小学校創立百周年記念事業実行委員会『山鹿小学校百年のあゆみ』昭和50(1975)年
 山鹿市『山鹿市史 下巻』昭和60年
 八千代座100周年記念事業実行委員会『八千代座100周年記念誌 これまでの100年 これからの100年』

平成 24 (2012) 年

熊本大学教育学部附属小学校『百年のあゆみ』昭和 50 (1975) 年

城東校(手取・山崎・城東)百周年記念会『創立百周年記念誌 城東校(手取・山崎・城東)百年の歩み』昭和 56 (1981) 年

創立百周年記念事業期成会『春日の歴史』昭和 48 (1973) 年

碩台校百周年記念会『碩台の 100 年』昭和 49 (1974) 年
慶徳小学校創立百周年記念期成会『慶徳百年』昭和 51 (1976) 年

五福小学校創立百周年事業期成会『五福百年』昭和 52 (1977) 年

一新小学校創立百周年記念事業期成会『一新百年の歩み』昭和 51 (1976) 年

瑞山小学校百年史編集委員会『瑞山小学校百年史』昭和 53 (1978) 年

名倉小学校百年史編纂委員会『名倉小学校百年史』昭和 49 (1974) 年

松阪市立松江小学校創立百年史編集委員会『松阪市立松江小学校百年史』1991 年

岩槻小学校開校百周年記念事業協賛会『岩槻小百年のあゆみ』昭和 48 (1973) 年

由木西小学校 PTA『由木西小九十年史』1967 年

芦原小学校百年史編集委員会『芦原小学校百年史』昭和 63 (1988) 年

荻生小学校百年史編集委員会『荻生小学校百年史』昭和 49 (1974) 年

伊賀良小学校百年史編纂委員会『伊賀良小学校百年史』昭和 56 (1981) 年

柏原学校百年史編集委員会『柏原学校百年史』昭和 50 (1975) 年

吉田小学校百年史編纂委員会『吉田小学校百年史』昭和 50 (1975) 年

長野城山小学校百年史編集委員会『長野城山小学校百年史』昭和 48 (1973) 年

長野県小県郡丸子町丸子中央小学校『丸子中央小学校百年史』昭和 48 (1973) 年

麻績小学校百年史編纂委員会『麻績小学校百年史』昭和 52 (1977) 年

付記 本研究は平成 28～30 年度科学研究助成事業(基盤研究(B)課題番号 16H03366)による研究成果の一部である。

資料1 『山鹿小 百年のあゆみ』 昭和50年(1975年)刊行より

<座談会>

明治時代Ⅰ (1871~1912)

江上平助さん	明治34年入学	大代寅次郎さん	明治41年入学
川上ナルさん	明治41年入学	萩 秋次郎さん	明治42年入学
横山新助さん	大正元年入学	鶴田嘉七郎さん	大正2年入学

萩 成績発表は、校舎の横に一番、二番、とずらり張り出されるのです。もうひとつは、初めて八千代座で学芸会がありました。二日間昼夜ありましてね、父兄もみんな弁当持参で、昼から晩までいろいろありました。その学芸会が、あとの生徒のリンチ事件につながりがあるのですが、まあその時の学芸は、明治天皇に殉死された乃木大将の一代記を、5年生がやったので特に記憶に残っています。

明治時代Ⅱ (1871~1912)

安達ノブさん	明治43年入学	北原タツさん	明治43年入学
福山ハマさん	明治43年入学		

司会 印象に残っている行事はありますか。

北原 それは一年に一回の学芸会ですね。八千代座で全員出演して、父兄もお弁当持ってきて朝から夕方までやりました。

安達 温泉を境にして上と下にわけて、二回同じことをやりましたね。私は箏をひきました。

北原 私は花のつどいというのに出ました。練習も時間をかけて、みんな出てやったんです。また、唱歌を合唱したりしました。たとえば大黒様とか……………。

福山 私は朗読でした。教科書の中からそれを読んだり、暗誦したりしました。

司会 八千代座ができたのはいつだったですか。

北原 初めて使われたのが、陛下のお葬式の映画の上映でした。私が小学一年の時、それを見ました。八千代座はきれいで、いつも芝居があってました。

安達 熊本の歌舞伎座より八千代座の方が踊りやすい、と役者がいってました。それ以前はお寺を使ったり、湯の端に小屋がかかったりしてました。下町の寺のあやつりや清流荘横のすもうなど、行事が決まっていたね。

司会 歌はどんなのを歌いましたか。

北原 校歌ができましたね。ゆんでにたずなの……(合唱)、夏は来ぬとか、みなととか、カチューシャをよく歌いました。

安達 カチューシャは本を買って隠れて読みました。松井須磨子が八千代座にきました。山鹿では見られないから菊池まで行って見ました。朝日館で初上映が、目玉の松ちゃんだったね。本は武士道文庫を読みました。

北原 小雑誌では赤表紙の十銭のものがありません。それから新聞小説を叱られるから、隠れて読んでました。本屋さんは高島さんと川口屋がありましてね。そのころ少女世界がやっと出たぐらいでしょう。

大正時代 (1912~1925)

高木大一さん	大正8年入学	鶴田弘之さん	大正8年入学
木村計介さん	大正9年入学		

司会 愛唱歌、こどものアイドルなどは。

高木 広瀬中佐とか児島高德とか、小学唱歌をよく歌ってました。校歌は“ゆんで(左手)にやはずのタケひいて、めえて(右手)に菊池の川清く”といった歌い出しだったと思います。よくは覚えておりません。

木村 昔は、歌の中に道徳教育が盛り込まれていましたね。「大楠公」や「水師營の会見」など、当時のモラル忠孝、人間愛などが教え込まれたような気がします。

- 鶴田 アイドルは栗島すみ子に目玉の松ちゃん。それに旗持万作、おつるかんじん、末子がビワひき。彦一ちゃんのゲナゲナ。アイドルではないけど……人気者だった。
- 司会 印象に残っている行事とか事件について。
- 鶴田 何といっても学芸会と運動会でしょう。学芸会は八千代座で、運動会は現在講堂が建っている下の運動場で開かれていました。上の運動場はまだ桑畑で、大宮神社に行くときは、桑畑の中にあつた大本教の敷地を通過して参拝に行っていました。
- 司会 ラジオや当時の愛読書などは。
- 木村 ラジオが初めて入った時に、上の運動場に集まって聞かされたが、受信機の調子が悪くてガーガーピーピーでおしまひだった。昭和六年ぐらいから普及し始めたように思います。
- 高木 雑誌は立川文庫、真田幸村や猿飛佐助。
- 鶴田 パラパラ活動というのがあつたなあ。画をかいた紙を指先でパラパラとめくると、残像の関係で絵が動いて見える。チャンバラなどが喜ばれました。
- 高木 日昇館の前身が朝日館で、親が同伴すれば自由に観ることができた。オーケストラボックスにトランペット、バイオリン、三味線、太鼓などが並んでいて、弁士が映画説明をしていた。二階には臨検席があつて、警官が座つて観ていたように記憶しています。

昭和戦前 (1926~1940)

緒方一光さん	昭和元年入学	星子最勝さん	昭和3年入学
池田芳子さん	昭和4年入学	甫足正喜さん	昭和6年入学
斉藤勝弥さん	昭和7年入学	立山正昭さん	昭和8年入学
中原由子さん	昭和12年入学	大森 健さん	昭和11年入学

- 司会 学校の行事や事業などで、印象に残っていることはどんなことですか。
- ・菊池・鹿本・玉名の三郡学童オリンピック
 - ・満州事変か上海事変の提灯行列
- の話題が出たあと以下の話になる。
- 甫足 講堂が出来たのが僕の二年生の時で昭和七年。記念の絵ハガキ二枚一組を配られたのを覚えていませんか。
- 立山 一枚は講堂の内部、一枚は上の運動場から観た全景だったですね。
- 斉藤 よく覚えているなあ。あの講堂は当時県下一の講堂と評判になったものです。
- 甫足 落成祝賀に学芸会が開かれた。防火水槽が校舎間にできたのが昭和十年。先生方の勤労奉仕でした。
- 池田 学芸会は盛んでしたね。講堂の出来るまでは八千代座で盛んでしたね。
- 甫足 学芸会という、たいへんな思い出がありますよ。当時山鹿小の音楽には、大代、坂田、吉良といった優れた先生方がおられて音楽教育には恵まれた時代でしたが、坂田先生という方は多才な先生で、音楽劇の創作、演出、指導など一人でなさって発表にも意欲的でした。先生作の音楽レビュー「山鹿の子供」は宝塚風の演出で、華やかなものでしたが主題曲がよくて、一時学校内で流行したものです。
- シャン シャン 鈴の鳴る山鹿の子供
灯籠かついで夜が更けりゃ……
- というのですが、先だつて東京にご健在の先生（もと東京都総務部長）に照会いたしましたところ、戦災で記録は消失されたそうで……
- それでも「あかい御神火 ほんのりと 灯りゃ 山鹿に鈴がなる」
- という一節を思い出して寄せていただきました。このレビューは熊本の旭座でも公演され、JOGK（当時の熊本放送局）から全国に向けて電波に乗せられた画期的なものだったので。
- 斉藤 大代先生の山鹿小音楽における功績は大きいと思いますよ。先生がおられたからこそ、音楽コンクールでも活躍でしたし、我々も音楽の心を育てることができた。
- 甫足 私たちは熊本の碩台校が全国優勝した年、県下で覇を争って、一緒に県代表に推薦されました。紙一重で負けてしまったが、全国二位の実力というところでしょうか。
- 斉藤 私たちの年、女子組が九州大会に出ました。碩台とは伯仲していましたね。

資料2 『城東校（手取・山崎・城東）「百年の歩み」』昭和56年（1981年）刊行より

明治8年 山崎小学校と手取小学校

昭和5年 山崎小学校と手取小学校が合併して城東尋常高等小学校が創設

<山崎校> 6名の寄稿があるが学芸会に関するものは以下の部分のみ

「私の山崎校時代」 大正11年卒 野坂保次

春の運動会は……想い出される。一年の終わりの学芸会の出し物は、花咲爺の物語であった。私が此処掘れワンワンまで、つづいて男女組の藤本君、最後が女子組の愛甲隆子さんであった。

<手取校> 卒業生4人の寄稿と2人の聞き取りが掲載されている。

「懐かしい母校」 手取校大正10年卒 大庭竹 保

略

5年生の時だったと思う。校内の学芸会があった。その頃講堂がなかったので東側の校舎の2階の教室を開放して行われた。丸坊主頭の学友十人余りと教壇の上で直立不動の姿勢で 鹿も四つ足 馬も四つ足 鹿の越えゆく この坂道 馬の越せない 道理はないと 大将義経 まっさきに大声をはりあげて歌ったことが記憶に残っている。

「五十年前の思い出」 手取校旧職員 森 テツ

私が手取校に奉職したのは、昭和3年4月でした。

中略

式や学芸会は2階の教室の間仕切りをはずして3教室ぶっ通した所でありました。学芸会でよく出来た劇や唱歌や作文の朗読などその頃始まったJOGK子供の時間に（午後6時頃）放送しました。その頃は、皆、生放送で、旧太洋の裏の放送局まで歩いたものです。

中略

その昭和6年4月、追廻田畑にあった旭座という劇場から生中継で、城東からは5年の劇と2年の「ねずみの留守番」というのを放送しました。

資料3 学校百年史より（熊本市内）

学校名	春日	碩台	慶徳
設立（明治）	6年	6年	7年
卒業生の寄稿（人）	×	○（戦時訓練に関するもの1）	○（10うち学芸会、歌に言及は2）
座談会掲載の有無	×	○（S24年以降PTA会長）	×
寄稿・座談会より		座談会では学芸会および音楽の話題はなし	S5年卒業 略年に一度は学芸会や写生大会があって、今の市民会館から市役所に到る坪井川畔は家は一軒もなく草原で、子供の遊び場所にもってこいの処でよく熊本城の長堀の方を向いて写生をしたものでした。水泳は下河原公園のプール。泳げる者と泳げない者とは帽子の線が違って、大変上手な者は黒帽子だったと覚えています。 私は明治四十四年十月二十三日に二年生として転入学をした。略三年の時に大島春子先生から校歌を習った。大島先生は東髪で、近代的な朗らかな空気を身につけられた若い美しい先生であった。あるときオルガンの手を休めて「つきぬ流れの白川を」とはどういう意味ですか、一と問われた。誰も顔を見合わせていたがS君が勢いよく手をあげて、「お月さんの白川に映つるところをそう言います。」と得意気に答えた。先生は「処置なし」と言った面持で返事もなかった。
その他	大正10年から始まった少年野球	明治30年9月に風琴が購入される	
	大正13年 第一回学童オリンピック	第4代 法校長時代 (T10年4月から10年間) 先生は生来・唱歌が下手で、特に師範学校卒業の時、音楽の成績は香しくなく、これに奮起せられ、唱歌の先生に優秀な人材を集め、児童の音楽教育を推進された。	
	大正13年 創立五十周年記念行事 各教室には、全国小学児童あるいは外国の児童等あらゆる方面から収集した図画、書方その他の成績品の展覧会、講堂には、歴代校長および本校出身者の写真、書幅、創立当初の旧教科書などが展示され、感興きわめて深いものがあった。	大正15年の新学期にドイツ製ピアノ（ベヒシュタイン）を購入 購入当時2400円とも3500円とも云う 当時市内では第一高女（県立第一高校の前身）にだけあったピアノを周囲の反対を斥けて大英断をもって購入されたのも特筆すべきことである。	唱歌演奏会 大正後期から昭和の中期にかけて行われた碩台独特の全クラス・全児童・全教師参加の唱歌発表のついでである。 唱歌コンクール全国優勝 昭和10年から12年までの4年間に男女合わせて、5回優勝の栄誉をかくとくしたことは碩台の歴史に永く残る記録である。
学校名	五福	一新	
設立（明治）	8年	8年	
卒業生の寄稿（人）	○（10ただし学芸会の記述なし）	○（10）	
座談会掲載の有無	×	○	
寄稿・座談会より		M33年生まれ 小学6年生の唱歌に「同胞すべて五千万」というのがあったが、わたしたちが6年生になってこの歌を歌うとき「同胞すべて六千万」と歌うことになった。 T5年卒業 一年の内で一番楽しいのは秋の運動会でした。当時は校庭がせまいので会場は藤崎台で現在の野球場の所でありました。（中略）音楽も今のレコードでなく、なまの楽士がやっかん高いクラリネットの音で天然の美の音楽が流れると何となくふんいきが盛り上がり、お母さんが心をこめて作ってきてくれた弁当を芝生の上で母子そろって食べた思出は今でも忘れません。 丹辺（T12年卒業） 昭和の初め頃まで、熊本城に住んでいた狸が夜、上通りのトギや支店の鷹をあさりに来ていたということも事実のようです。その頃、歌われた唄に「上り下りの唐船、和船」という題で、「こちらは塩屋町、向こうは船場、上り下りの唐船、和船、急いで上るがお伊勢坂、お伊勢参りのほどの良さ」という歌がはやっていました。	
その他	明治26年、この頃の年中行事として、春秋二回の水前寺出浮と、年一回の兎奔、席書大会等が児童にとって楽しい学校行事であった。		
	大正8年、当時の商議員であった有働俊治氏の音頭で、五福校にはじめて整形のピアノが設置された。もちろん、地元の人たちの寄付である。代価900円となっているが、前の教員の給料と比べてみると、ずいぶん高価なものであったようである。		
	大正10年12月ランドピアノ寄贈（寄付者29名） 大正10年7月5日五福校後援会の設置について提案があり、満場一致で賛同を得た。五福後援会は、学校と家庭との連絡を密接に致しまして、教育の効果を助長し、或いは学校当事者の計画希望に賛して実現をはかり、その他、運動会、展覧会、学芸会、修学旅行に便宜を与える等、学校に対し、暖かき同情者となって、力ある後援者たらんと欲するものであります。		

資料4 学校百年史より(熊本県以外)

学校名	瑞山小学校	名倉小学校	松阪市立松江小学校	岩槻小学校
所在地	徳島県美馬郡貞光町瑞山	兵庫県神戸市	三重県松阪市	埼玉県さいたま市
卒業生の寄稿(人)	○	×	○	×
座談会掲載の有無	×	×	×	○
学校史の記述		学芸会は児童の学習成果を地域の人々に訴えて、学事に対する関心を昂めるとともに、児童の学習意欲を喚起することにあつた。その端緒的形態と見られる朗読会、談話会は30年代からほうほうで行われたが、記録の上では明治37年7月18日が初見で、次は翌年3月24日卒業証書授与式後第2回談話会が開かれ、父兄数十名が参加している	昭和初期の章に遠足、修学旅行の項はあるが学芸会はなし	
寄稿・座談会より	旧職員7名と卒業生6名からの寄稿 うち2名に学芸会の記述あり 一番楽しかったのが運動会、中略、また毎年旧正月には学芸会、書き方、図画の展覧会があり、この日はかりは部落総出の人々で教室も廊下もたいへんなにぎわいでした。私たちも力作を見てもらおうと張り切つてがんばりました。遠足はありませんでしたが、6年生のとき琴平へ旅行しました。 昭和2年3月卒業 小学校へ入学してからは、遠足や学芸会が楽しい思い出として残っています。遠足には川やお寺へ母のつくってくれたおにぎりとおやつをもって、歌を歌いながら歩いて行きました。また、お弁当を作ってもらうのが楽しみで、夜が眠れませんでした。 昭和37年3月卒業		永嶋みつ (大正15~昭和15在職) 「展覧会や学芸会、高等科女生徒の交わり、海人草の服用、祝祭日に学校でいただく饅頭など、行事にまつわる思い出がたくさんあります。」 卒業生 山田正子 「6年生の学芸会で、石童丸の劇を行い、刈萱役になった事が一生のよい思い出になっております。6年生の修学旅行で京都へ連れてもらい、御所拝観をさせてもらい、当時の田中義一首相がご即位の礼で、万歳を三唱された紫宸殿も見せていただき、ほんとうに楽しい旅行をさせてもらいました。」 佐久間 博 「毎年、12月に展覧会。3月には、学芸会が行われた。私達は、無心で元氣よく学校生活を送ることができた。」	M39,39,41, T元,2,3,3,4,4. 6年卒の計10名の座談会 「古老の語る明治時代」 文化面での思い出は？ 学芸会があった 学芸会を高等でやって尋常ではやらなかった。学校でやったな。しゃべったり、歌ったり、演劇をやったのは記憶にない。 ぶち抜き教室でやったんだな。 茶話会を教室でやったことがある。せんべいが出た。
学校名	由木西小	芦原小学校	荻生小学校	
所在地	東京都八王子市	福井県坂井郡芦原町	山形県西置賜郡飯豊町	
卒業生の寄稿(人)	×	×	○	
座談会掲載の有無	○	○	×	
学校史の記述				
寄稿・座談会より	旧職員の思い出 (略)当時(大正時代)、唱歌を担当していた私は、君が代や他の歌をじょうずにまちがいなく歌ってくれよう心に祈っていたものである。 学芸会、展覧会、運動会もやはり本校に集まって、いっしょに楽しくやっていた。 本校や東分教場に負けぬように先生も生徒もたいへん張り切っていたものである。 ピアノ購入 昭和25年 PTAで	昭和初期の学校を語る 出席者(旧職員)6名 文芸会、学芸会などは秋に行われしました。 明治・大正時代の思い出 出席者(卒業生)5名 鈴木:唱歌の時間にはオルガンで「箱根の山」を高等科1年でならいました。 野村:2学期の終わりの12月頃には研究発表や劇やらをして農産品評会などもありました。 大正・昭和初期の思い出 出席者(卒業生)6名 西出:唱歌の時間はオルガンで習いました。ピアノはずっと後で、音楽室に1台と講堂に1台ありました。朝礼は毎日、乾布摩擦もしました。体育の時間にはドッジボールがさかん 川崎:文芸会は3学期で、唱歌の発表や演劇のようなこともやりました。	明治43年卒から昭和47年卒までの27名からの寄稿あり そのうち戦前は16名 いずれも学芸会の記述なし	

資料4 学校百年史より(熊本県以外)

学校名	伊賀良小学校	柏原学校	吉田小学校
所在地	長野県飯田市	長野県上水内郡信濃町	長野県長野市
卒業生の寄稿(人)	×	○	×
座談会掲載の有無	×	○	×
学校史の記述	<p>267p 学校日誌によると学芸会ということばは、大正7年8月2日の中村尋常高等小学校のものに1回だけででくる。これと下の写真を参考にとすると、今の音楽や踊りをステージの上でやったのではないか。 8月2日夏休みに入ってから、学芸会というものめずらしいが、当時としては常例であったという。古老たちの話によると、蓄音機が珍しかったという。どんな歌だか講義だか内容は忘れたが、音が出る機械に驚いたという。</p>	<p>「学芸発表会」という記述あり</p>	<p>唱歌会 大正期の音楽関係記録は、儀式の歌の練習のみ、昭和5年度に初めて唱歌会の記録が残されている。その後、8年からは夏と冬と2回行われ、1回は歌う会、1回は聴く会とされた。 演目の記述なし</p>
寄稿・座談会より		<p>19名からの寄稿はあるが、学芸会等の記述なし</p> <p>座談会 80歳代 出席者 外谷嘉三治(明治29年8月8日生) 青柳一信(明治27年6月18日生) 子どものたのしみは? 運動会か遠足、いなごとり、いなごとりはたのしみにはいらぬな、遊びではブランコ、鉄棒、大きくなるとテニス、動よう木があった。庭をたどんであるいていたんさ、女子は手まり、お手玉、おはじき(ももの実の割ったもの)そんなものさ。 どんな唱歌がありましたか? 尋常科は、かあかあカラスとか、もしもしかめよとか、オルガンは学校で1台しかなくて小使さんがオルガンを背負って歩く(12貫?)それが分教場へ背負っていったり、また背負って帰る。子どもが持ってやる楽器はなかった。</p> <p>座談会 70歳代 出席者 明治32年生1名、33年生2名、35年生2名 遠足は春秋で2回ぐらいありました。 運動会については、当時は11月3日と決まっていた。 音楽会、学芸会などはありませんでした。 音楽会はなかったが、学校で蓄音機をきかせてもらいました。</p> <p>座談会 60歳代 6人参加 明治45年生4名、大正元年生1名、2年生1名 学芸会の記述なし 運動会、遠足、修学旅行はあり</p>	
学校名	長野城山小学校	丸子中央小学校	麻績小学校
所在地	長野県長野市東之門町	長野県小県郡丸子町	長野県東筑摩郡麻績村
卒業生の寄稿(人)	×	×	×
座談会掲載の有無	×	○	×
学校史の記述	<p>学期ごとの演習会 明治36年12月第1回を行い、以後恒例となり、大正6年まで続いた。 演習の科目は、体操、図工、書き方をのぞいた全教科にわたった。 大正5年12月、はじめて唱歌会が尋常5年生以上によって行われた。この唱歌会は翌6年にも、尋常5年生以上によって体操室で催された。</p>	<p>明治41年7月31日 学芸表彰会 学芸表彰会は、毎学期(7月、12月、3月)に行われて内容としては、話方、読方、唱歌、綴方、応用話方があり、約2時間を費やして実施している。</p>	<p>昭和3年にラジオ、昭和5年に蓄音機、昭和14年にピアノ、昭和15年二宮尊徳像が整備された。ピアノの披露唱歌会は昭和14年3月3日に実施。</p>
寄稿・座談会より		<p>座談会の中で 大正9年6月第1回唱歌会 大正9年9月に製糸家がグラランドピアノを寄付してくれまして、そのピアノで3記念音楽会をやりました。</p>	